学術的な珠算書「大成算経」ができた

関孝和やその弟子建部賢弘らによって宝永7年（1710）に書かれた「大成算経」は、漢文で書かれていて、かけ算の算法12種、わり算の算法7種、その他数学に関することが全20巻にわたって記述されています。

わかりやすく書いたそろばんの本がではじめた

そろばんが庶民の間に広まってくると、塵劫記などよりもっと丁寧にそろばんの計算法を説明したり、わり算九九の解説を記したりした初心者向けの珠算書が出版されるようになりました。

「初心算法早伝授」(享保11年1726)、「十露盤独稽古」(享和元年1801)、「教塵劫記独稽古」(文政8年1825）などがそうです。

商除法が紹介された

山本一二三の「十露盤独稽古」(享和元年 1801)、「加目位算早割即席伝」(文化2年 1805）などに商除法が紹介されましたが、普及しませんでした。 —亀井算の項を参照—

四つ珠そろばんを考えた人がいたが、使われなかった

安永10年（1781）に乳井貢の「初学算法」の中で、「珠は1から9までをあらわすことができればよい」という理由から、四つ珠そろばんにすべきことが書かれていますが、使われませんでした。